西大寺工芸調査概要

美術工芸研究室

南都の名刹にはどのくらい、また、どんな作品が所蔵されているかということは予想も、予測も出来ない。一般には南都の名刹のもつ作品は、全てにおいて調査がなされていると思いこまれているようだが、実態は違う。知られているものは各寺の看板的なものや、何時、訪れても容易に拝見できる作品に限られていて、寺の所蔵品全般にわたつての調査はなされていない現状である。

いまゝでに、部分的の調査は散発的に行われたことはあつても、総合調査は実施されなかつた。これには理由のあることで短時間、短日月ではとても出来るものではないということである。それほどに作品の数も種類も多く、複雑である。

研究所創立以来、美術工芸研究室の絵画、彫刻、工芸三室は、名刹の美術工芸品の調査にあたつてきた。昭和29年の唐招提寺調査を最初として毎年調査をつゞけている。

建造物研究室、歴史研究室の文書班と協力しての調査態勢もなされてきた。優品、名作のみの調査ならば短時日で可能かもしれないが、蔵品の全部をことこまかに実測調査することは、点数が多ければ多いほど短時日では出来ない。

美術工芸研究室は昭和30年7月、8月にわたつて西大寺調査をおこなつた。この時は西大寺の叡尊を中心として、という焦点にしぼつたため全部にわたることは出来なかつたのである。そのご全般にわたる計画をたてながらも実現出来なかつたが、36年に西大寺絵画調査を実施して西大寺の絵画作品の全貌をはじめて明らかにし、いくつかの未知の作品を発見した。その一部を36年度の年報に公表したのである。

37年度は、絵画調査につゞき工芸作品の調査を実施し、212件、点数300点を数える作品を調査した。品種別にこれをみると、漆工69件、陶瓷86件、木竹甲角5件、金工108件、石製品7件、染織6件である。

さらに、昭和30年調査の工芸作品の89件を加えると、その件数点数ともに増加するが、37年度の調査作品のみにとどめ、その一部の紹介におよびたい。

現在、南都において春の行事に数えられる一つに西大寺の大茶盛がある。毎年4月13、14日の両日愛染堂の客間で行われるが、高さ21.0㎝、口径35.5㎝の大茶碗で5人1組となつて飲み廻す茶宴、この茶宴が叡尊よりはじまるとされ、今日まで続けられている。この史実の確否はともかく、今回調査した陶瓷86件のうち、大茶盛に関連した作品が40件を数えることは興味をひくし、その茶宴がいかに盛大になされ

てきたかを物語るものと云えよう。

呉州赤絵鉢（18箇の内）（第1図）

高さ　12.4cm　口径　25.0cm　底径　10.0cm

18箇現存するが18箇とも法量はほぼ同じで、文様も同系のものである。11箇は、見込みに「魁」の字をかき、他の7箇は、見込みに花卉文様を出し、18箇ともいづれも外側面には花鳥文様を描く。いわゆる赤絵で、鉢であるが、西大寺においては茶碗として明治の中頃まで、毎年催される大茶盛用の茶碗として使用されていた。

これらを納める箱があるが、その蓋表に、

「呉洲赤絵茶碗十八之内」

側面　は

「　大寺

年預方

箱の裏底に

「文化七庚午歳

四月　新調

当年預

英堂」

当奉行

高判

の墨書がある箱と、同じく

蓋表、側面、底裏に

「呉洲赤絵茶碗十八之内

当年預　尊瑠

当奉行　尊識

宝暦九己卯歳

正月吉日　新調之一

の墨書のある箱がある。墨書の年代はおそらく箱を新調した時の年代で、作品の年代ではあるまい。呉洲赤絵は明末に福建あるいは広東の地方窯で日本及び南方向けに大量生産された粗雑な貿易品とされているが、あの野趣ある釉色や赤絵の描写に茶人達がひかれ、茶人間に人気をもつた作品である。

第1図　呉州赤絵小鉢

18箇の赤絵鉢は殊に優れた作品とは云えないが、赤絵特有な味をよく表出している。茶人達の寄進によるものではあるまいか

有田焼鉢（二箇の内）

江戸時代（第2図）

高さ12.1cm

口径24.1cm　底径10.2cm

これも鉢と思われるが赤絵鉢と同様に大茶盛使用した茶碗とされている。見込みに、梅に芭蕉

第2図　有田焼小鉢

を描き、外側には牡丹、あやめの文様を純白の素胎に赤、緑、藍に金を加えて賦彩した美しい磁器。2箇あるが、1箇は諸所に破損があり修補がほどこされてある。

前述の赤絵鉢と共にこの鉢も茶碗として、大茶盛に使用したと寺では口伝されているが、これらばかりではなく、染付の鉢も大茶盛の茶碗として使用されていた。その染付鉢も現存するが、これらの作品は西大寺の大茶盛を研究する新資料といわねばなるまい。

天目盆　木製朱漆塗　室町時代（口絵、第3図）

高さ　11.2㎝　口径最大　49.8㎝

八花弁をかたどつたまことに堂々たる作風をもつ盆で、脚も八花弁で形成し、一弁の巾は14.3㎝、脚の高さ7.0㎝。根来塗とよばれるもので、根来塗特有の朱漆の美しさは見事なものである。盆の底裏に朱漆銘がみられ、

「享徳四年乙亥正月日
西大寺沙弥方天目盆
沙弥知事実明房」

と記されてある。

寺では茶器に使用されたと伝えられているが、必ずしもそれのみに用いられたものでもあるまい。他に、根来塗の盆は大小の差はあるが3点伝えられている。しかし、この作品と同じ作品はなく、ただ1箇しか伝わらないが、損傷はなく見事な作風をもつ盆で、室町時代の根来塗を知る貴重な資料である。

第3図　天目盆底朱漆銘

天目台、木製朱漆塗
室町時代　（第4図）

高さ　9.6㎝
口径　8.7㎝　底径　7.4㎝

根来塗と称されるもので金箔押しが施された気品のある作品である。台うけには六弁花形を出し、成形に美しい調子を出した作品で、享徳4年在銘の天目盆と一連の感が深い。これは茶器として使用されたもので、天目台はこの他に3点伝えられている。2点はこの作品と成形も異り作風も同一でなく、時代も少し降ると思われるが、1点はこの作品と同一系統の作であるが金箔が押されていない。

第4図　天　目　台

香合　堆黒　室町時代　（第5・6図）

高さ　4.5㎝　身口径　13.0㎝

蓋縁は破損しているが、全面に牡丹花文様を堆黒にした香合で、西大寺においては、最大の法会、光明真言会の時にのみ限つて使用された香合である。作風のまことに優れたものと云うべき作品ではないが、本格的な堆黒の作品といえよう。残念ながら破損がひどく取扱いも危

第5図　香合　推黒

険であるが、そのため却って手法などよく研究出来る現状でもある。蓋裏の朱漆銘に、

一　奉施入覚雅

西大寺光明真言名合器

永正十二乙亥八月日一

とあり、身の底には、同じく朱漆で、

一　奉寄進

西大寺光明真言方

小年預覚雅　一

とあり、身の底裏にも朱漆で、

一光明真言名合器一

と記されてある。

破損のひどい作品であるが、当時の堆黒を知る一つの資料であろう。また、この香合を納める容器は同時代の曲物で、雅味豊かな作品である。

第6図　蓋裏朱漆銘

うちならし、銅製

鎌倉時代（第7・8図）

高さ 9.0cm　径 27.0cm

銅板の打出しによるもので、小形ではあるが安定感のある作品である。仕上げも美しくなされて、音もいい。光明真言会に使用される仏具で、底に針刻銘がみられる。

第7図　うちならし

一奉寄進西大寺

右為毎年八月七箇日

不断光明真言修法

所奉寄進如件

元徳三年辛未八月七日

施主浄住寺尊瑜一

針銘により浄住寺尊瑜の寄進と知られるが、この類の仏具に年紀が記されていることは全く貴重なことといわねばならない。この類品の作風を知る一つの基準作品とも云えよう。光明真言会は西大寺の最も重要な法

第8図　うちならし底面

会であるため、この修法に使用された仏具類は吟味されて作品がえらばれたと考えられる。この仏具をみてもそのことが察せられよう。

獅子丸　銅製　鎌倉時代（第9図）

高さ 15.0cm　径 40.0cm

銅板の打出しで鍍銀された打鳴しであるが、獅子丸の名称は何に由来するのかわからない。薄手で元徳3年在銘のうちならしと同系の作風をもつが、堂々たる作風をもち、安定感と一種の圧迫感さえもつ仏具である。

叡尊が異賊降伏の祈祷を行うときに常に使用したと伝えられ、これを納める箱の蓋表にも、

一　獅子丸

文永元年異賊
降伏祈祷之時
亀山院御寄附」

と墨書されてある。しかし、文永元年に叡尊が異賊降伏の祈祷を行った記録はみあたらない。外敵襲来に対して叡尊が詔を奉じて、その修法を行ったのは文永11年10月に天王寺と教興寺に於てであり、その時は、亀山天皇の行幸があった。その前年、文永10年にも勅を奉じ、伊勢太神宮に参籠して国家安穏の祈祷を行っているが、この場合、外敵に対しての祈祷もなされたことだろう。

そのご、弘安3年春3月、勅願によって叡尊はふたたび、伊勢太神宮に参詣して異賊退散の祈りを捧げている。弘安4年には、教興寺、男山八幡宮において異賊降伏のための法会が大々的に行われた。叡尊が勅を奉じて、文永、弘安の蒙古襲来に対して退散祈祷を行ったのは事実であり、その際、種々の仏器仏具を使用したことも事実である。

しかし、この獅子丸がその仏具類に直結しうる記録は見出せない。

今、試みにこの獅子丸を打ってみよう。表現し難い異様な音響は、妖気をふくむとさえ感じられるふんいきをかもし出す。数百人の僧侶達が非常時突破を願っての祈願読経を一段と盛上げるに効果的な音調を蔵している。獅子吼にあやかって獅子丸の名称が生れたのかもしれない。

獅子丸のもつ作風と、音響の効果性からみて、寺伝の叡尊使用説は肯定しても差支えあるまいと考えられる。

音を発する仏器仏具の研究は、その様式、作風を研究することはもちろんであるが、音調の効果が計算されて作成されたと考えるならば、その音調研究は今後、一段と深められなければならないだろう。

（守田公夫）

第9図　獅子丸